特集
30年・100号に寄せる

『槲』　100号に寄せる！

宮　英司（本会会長）

今年は寺田寅彦記念館友の会が活動を始めて30周年となります。また、『槲』が今号でちょうど100号となります。30年の活動と100号の積み重ねをともに喜びたいと思います。

さて、『槲』第1号は平成6年5月に発行されています。目を通してみますと、1頁には「においの追憶」という寺田博士の随筆。2頁は「寺田寅彦邸址の庭園樹」刊行の紹介と「第1回寺田旧邸の樹木を調べ寅彦随筆を鑑賞する会」の案内。3頁からは「『ゴムの木と称する木』の疑問をめぐって」の紙上討論会が7頁まで続いて、太田文平さんと山根木暎子さんの「ゴムの木」に関する深掘りと新しい見解の登場。事務局の堀見矩浩先生が見事なまとめと問題提起。（本当に、博士の見たゴムの木はどんな木だったのだろうと興味津々に…。）8頁と9頁は山根木さんの「『寺田寅彦邸址の庭園樹』を読んで」というお便り。ラストの10頁は「事務局だより」という充実のラインナップです。

ところで、『槲』の謂れについては『槲』第1号本文では次のように説明されています。

> カシワモチはこの槲の若葉で包まれる。寅彦が随筆「庭の追憶」にその幼時の思い出を記していること、また寺田旧邸を象徴する高木・大木であるところから本会報を『槲』と命名した。

以来、毎年の総会の折には必ず参加者がカシワモチを食することを伝統としてきました。

『槲』の歩みをふり返る徳島の四宮義正さんの文章は、30周年と100号の歴史を分析的に著しています。先人がどのような思いで、本会を発足させたのか…。折に触れて読み返したい内容が凝縮されているように思われます。本会の草創期の熱気を肌で感じながら今後の活動に活かしていきたいと考えるものです。

「わたしとトラ」については、日頃あまり投稿されない方々にぜひ…との思いで企画しました。寅彦の作品とか寅彦銅像とか寺田寅彦記念館とか、高知県立文学館、寅彦やトラに関係したものであれば何でもよいことにしました。この企画は80号で「私の好きな寺田寅彦の言葉」で多くの皆様の原稿を募集して以来のこととなります。

「記念切手カード」については、100号記念に何か思い出に残るものを…との発想で、名古屋の副会長・山田功様がお持ちの貴重な切手をカードに加工して会員の皆様に贈呈してくださるとの有り難いお申し出となりました。感謝感激！ありがとうございます。

因みに、文化人切手（第一次）は1949年から1952年までの間に発行され、野口英世、夏目漱石、正岡子規、寺田寅彦ら18人が対象となっています。私たち「寺田寅彦記念館友の会」の会員だけの「記念切手カード」です。ぜひ、大切にしていきましょう。

100号をふり返ってみますと、本会を起こした先人の着眼点の鋭さに感服するとともに、新しく若々しい世代によって本会が維持されてきていることへの素晴らしさに改めて思いを致すものです。これから先も、寅彦の作品等を通して、その感性に迫りながら、世の中の出来事や厳しい自然現象についても受け止め、考えていきたいものだと思います。つきましては、『槲』200号を目指すとともに、友の会が40周年、50周年…と発展していくことを願って100号発刊のご挨拶とさせていただきます。

寺田寅彦記念館友の会 30 周年、会報『槲』100 号を祝して

山田　功（本会副会長）

本年で、寺田寅彦記念館友の会が 30 年を迎え、会報『槲』が 100 号を発刊することになった。誠にめでたい事である。友の会は 30 年の間には存続の危機もあったが、皆さんの知恵と行動力で乗り越えてきた。寺田寅彦の銅像建立という大仕事もなし遂げた。当時の役員さんの努力の賜である。そして、今は寅彦の朝ドラ実現へ署名運動を行っている。そうした中で、会報『槲』は 100 号に達した。良く続いたものである。事務局の編集担当者の強い執念を感ずる。

会報の名前が「槲」となった理由が『槲』1 号に書かれている。「寅彦が随筆「庭の追憶」にその幼時の思い出を記していること、また寺田旧邸を象徴する高木・大木であることから本会報を『槲』と命名した。」とある。良い名前だと思う。槲の葉は枯れても新しい葉がでるまで枝から離れないという。そこで思い出すエピソードがある。お正月を過ぎたある日、受験生の父親という人が来て、槲の葉をいただきたい。葉が落ちないというので、長男の大学受験の時、葉をもらっていって祈願したところ見事に合格した。今度は次男が受験するので、是非一枚いただきたい。と『槲』16 号（平成 10 年 2 月）で紹介されている。寺田邸の槲の落ちない葉はご利益があるようだ。

会報『槲』が第 20 回寺田寅彦記念賞（高知県文教協会主催）を受賞したことを『槲』28 号（平成 13 年 2 月）で大きく報じている。『槲』は貴重な寅彦研究誌として、また会員の交流の場としてこれからも長く続くことを願うばかりである。

先人に感謝「寺田寅彦記念館友の会」30 年・『槲』100 号

宮﨑　嗣生（本会副会長）

「寺田寅彦記念館友の会」が結成されて 30 年、併せて会報『槲』の発行が 100 号に達する節目に、「記念号」を発行することができました。大変喜ばしいことです。

まず、本会結成にご尽力いただきました方々、そして今日まで、本会を支えてくださった歴代会長はじめ関係各位に深く感謝申し上げます。

30 年を経た今日、会員数は約 100 名高知県内外にお住いの方々で構成され、そして、毎年、春には総会と記念講演、秋には研修会が継続して開催されています。

さて、現在の会員数が多いのか少ないのかについては評価の分かれるとこです。したがって、ここではそのことについては触れないことにします。しかし、素晴らしい点は、総会と記念講演そして研修会は、毎年、和やかな雰囲気の中で真摯な協議がなされていることです。

それは本会の会員であることの居心地の良さ、会員同士互いに学び合い、他者を認め、決して研究の成果の競い合いではないことの証ではないかと考えます。

このような会の性格や体質が 30 年の歩みの中で徐々に形作られてきたのは結成と同時に作成された会則に起因しているのではないでしょうか。一見、大雑把に見えますが、基

本形は明確に記されています。例えば、本会の目的として「寺田寅彦の人と作品を研究し、会員相互の研鑽と親睦を深め、高知県の教育向上に寄与するとともに、寺田寅彦記念館の機能を援助し、運営に協力する」としています。初めて寺田寅彦を知った方でも、どんな動機からでも、科学、文学、歴史、音楽等寅彦が関わったことに少しでも興味を抱いていれさえすれば入会は可能であると理解できます。このように会則は脇を締めすぎず、緩めすぎずバランスの取れたものになっていることは評価に値すると考えます。

最後に、今日まで本会運営の道筋をつけていただきました依光初代会長をはじめ創業者の方々のご苦労と将来を見とおした先見性に改めまして敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

『槲』100号と「友の会」発足30周年

伊東 喜代子

昭和42年5月、邸跡及び居室（勉強部屋）が高知市史跡となり、昭和59年11月主屋を復元して寺田寅彦記念館が開館した。この記念館に寺田寅彦記念館友の会が発足して30年という長くて短かったような年月を過ごして来た。

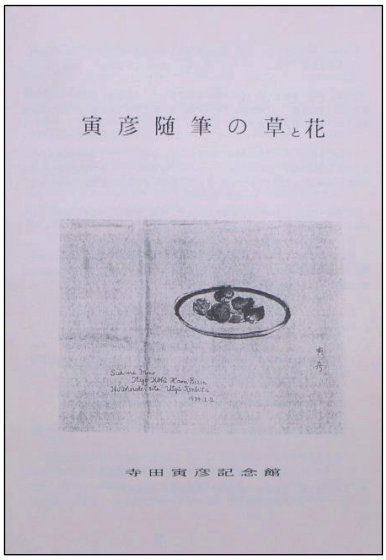
記念館を時々訪ねて下さる諸先生方が集まり、寺田寅彦先生の多才な業績が埋もれている事を少しでも皆様に発表し身近に感じてほしい。高知が生んだ偉大な科学者、随筆家をどのようにして知って頂こうかという事から始まり、平成6年5月に『槲』第1号として研究誌を刊行した。それまでの6年間、県内外から尋ねて下さる方々に納得して頂ける説明が出来るよう全集を読み、メモを重ねていった。

寺田先生の随筆「庭の追憶」を読み、一番身近に感じる事は庭園であった。庭の中央に一番大きな槲の木がある。この槲は、先生のお母さんが5月の節句にお餅を作ってくれていた思い出の木である。少年期を過ごした懐かしい庭の思い出を書いたエッセイであることから友の会が準備段階から研究誌に「槲」と命名した。冬葉が枯れても新芽が出る迄何枚かが残る縁起の良い木で、後が絶えないようにという意味からも会報を『槲』と決めた。

そうして庭の隅々迄の現存している樹木の名前を調べ、寺田寅彦先生の全集を調べ、書き込みをしていった。他にも飛石や灯籠の位置を書き込み「寺田寅彦邸址の庭園樹」の冊子を作り刊行した。そのことを記念して読書会や俳句会、お香の会、一絃琴など記念館に集う方々にも知って頂く為に、寅彦先生の随筆を観賞する会を開く事からスタートした。俳句を詠んでいる方々には季題として樹木の名前が判って嬉しいと喜ばれた事があり、私も嬉しくなった。この冊子も人気があり、次は「寅彦先生の草と花」を刊行する事を決め、随筆を読み、草花について書かれている所を調べ書込み始めた。随筆の中に270種もの植物の名前が出ているという。一つ一つの植物からもなぜだろう、どうしてだろうが判る沢山の事を見聞する。好奇心であり、知った事を書き留めることを続け冊子が出来上がった。興味ある方が集まり始め、こうして平成7年5月に正式に寺田寅彦記念館友の会が発足して多くの方が会員さんになって下さった。全国のファンの方々が『槲』を通じて情報を寄せて下さり、いろいろなことを知る事が出来て、投稿して下さった皆様に感謝感謝の日々

です。会長さん始め役員さん、熱心な会員さんに受け継がれ、30年の間には色々と大変な事もありましたが、これからも槲の木のように大きく広がる友の会であり、150号、200号とずっと続いていく事を願いつつ、今後も皆様のご協力をよろしくお願い申し上げたいと思っています。

藪柑子（花言葉）　明日への希望



「寺田寅彦邸祉の庭園樹」　「寅彦随筆の草と花」　伊東喜代子著「寺田寅彦先生と私」

『槲』の100号達成と、貴友の会の30周年、おめでとうございます

神田　健三（中谷宇吉郎雪の科学館　顧問）

『槲』は、表紙で寺田寅彦の随筆を紹介し、関連する記事が続き、更に自由な投稿や情報、という一貫したスタイルを持ち続けてこられたようです。表紙の随筆の一節からその魅力に引き込まれ、読み応えある記事に導かれます。『槲』が長く続いてきたのは、貴会が、寅彦についてのいろいろな面からの研究や、先を見通した準備など、粘り強く努力を重ねてこられたためと拝察し、100号の達成をお慶び申し上げます。

貴会はまた、30周年の節目を迎えられたそうです。実は、中谷宇吉郎雪の科学館も今年が開館30周年です。この大きな節目を、共にお祝いしたいと思います。

今年の元旦の能登半島地震で、雪の科学館は地盤沈下などの被害を受けました。幸い、館の内部の被害は少なく、開館を続けることができていますが、「天災は忘れたころにやってくる」の寅彦の警句が、ますます重要になっていると感じます。

貴会は寅彦の銅像建設の運動をやり遂げ、今度は「寅彦を朝ドラへ！」の運動を展開しておられます。実現すれば寅彦を多くの人に知ってもらう上で大変有効でしょう。私も応援しています。

寅彦と宇吉郎の科学のこころを広めるため、共に努力していきましょう。

潮　時　潮　目

伊崎（いざき） 修通（のぶゆき）（窮理舎）

この原稿を書いている今、庭の藤が今年もまた生長し、蔓をぐんぐん伸ばしています。その様子を見る度に思い起こすのは、私が科学随筆誌『窮理』を創刊すると同時に、この友の会に入会した 2015 年夏のことです。早速送られてきた『槲』第 74 号には、山田功氏が当時書かれた「藤の実がタネを飛ばした時の写真」と題する記事が掲載されていて、大変感動したのを覚えています。

コロナ禍になって間もない頃、山田氏から『教科書に掲載された寺田寅彦作品を読む』が届き、その中に上記の「藤の実」に関する一連の解説が収められているのを見て、新たな単行本化を企画しました。それが『寺田寅彦「藤の実」を読む』です。この出版背景については山田氏の記事が第 95 号に掲載されています。そこに記載のとおり、山田氏から戴いた藤の実が御本人との電話中にはぜ、その幾つかの種を庭に植えたのが冒頭の藤です。

友の会と『槲』の縁によって『窮理』は成長し、今は庭の藤も見守ってくれています。この藤がいずれ花を咲かした暁には、『槲』で報告できる「潮時」が来ることを楽しみにしています。今回の第 100 号が新たな一歩への「潮目」となることも願いつつ…。

会報『槲』100 号刊行に寄せて

野村　学

会報『槲』が 100 号を迎えるにあたって手元の『槲』を手に取ってみた。わたしが入会させていただいてからの 65 号から 99 号まで、そして今までに発行された合本第 1 集から第 6 集である。

30 年におよぶ友の会の活動の証しであるその会報。毎号巻頭を飾る寅彦随筆はその時々の時宜にかなったものが選ばれており編集部の方々のこだわりが光る。また会報には会員による多彩な寅彦研究の成果が披露され、得がたい情報源となっている。

例えば山田先生の「藤の実はいつはぜるか」や「藤の実がタネを飛ばした時の写真」はまるで寅彦先生の研究過程を見るようで何度も読み返した。

また四宮さんからは『槲』誌上で数多くの新資料、新情報を教えていただいた。『地球物理学』に中国語訳があること、高知市の成人式で寅彦の肖像メダルが贈られたこと等々、マニアックな情報が次々と紹介され、わたしなどは「まるでシャーロキアンのようだ」と思ったものである。

そういえば友の会会員で寅彦書誌学の泰斗であられる大森一彦先生に「シャーロキアン」（シャーロック・ホームズの熱烈なファンのこと）を捩った「トラゲーネフトラヤン」という素敵な造語がある。

『槲』100 号刊行及び友の会活動 30 周年を機に、わたしたちも「トラゲーネフトラヤン」として力を合わせ、益々素晴らしい友の会活動となるよう頑張りましょう。

トラゲーネフトラヤン、万歳！

友の会 30 周年・『槲』100 号への歩み

四宮 義正

本会の会報『槲』が第 100 号になった。振り返ってみれば、第 1 号は 1994（平成 6）年 5 月に発行されているから、ちょうど 30 周年である。表紙となる第 1 ページ、毛筆の「槲」文字の下に「寺田寅彦記念館友の会」、欄外に「寅彦研究」とある。翌年 5 月発行の 5 号及び特集号を見ると、1995 年 5 月 20 日の総会で会則や会費、役員が決められているので、友の会正式発足はこの総会かもしれないが、実質的には 2024（令和 6）年が友の会創立 30 周年といってよいだろう。

古い槲を繰っていると、号外ともいうべき特集号が 8 回出ていることに気がつく。よって 2 年あまり前に会報の発行が 100 回に達していたことが分かる。判型は、61 号（2010 年 3 月）までは B5 判・縦書き、62 号（2011 年 6 月）から A4 判・横書きに変わっている。

創刊号の巻頭随筆は寺田寅彦の「においの追憶」であった。高知の家にあった「ゴムの木」と称する灌木の、特にその匂いの思い出であるが、本文で太田文平氏や山根木暎子さんの研究成果を載せている。今もって、この「ゴムの木」の正体は決着がついていないようである。

初代の編集長は堀見矩浩さんで、「ゴムの木」に関する資料検討でも分かるように、会員に手紙で呼びかけるなど情熱をもって「寅彦研究」に長く取り組まれた。会報に編集者の氏名が無いので、堀見さんがいつまで編集を続けたのか正確には分からなかったが、53 号あたりまでだろう。

改めて当時の槲を見直してみると、紙面がよく考えられていることに気がつく。巻頭に寅彦の随筆を掲げ、会員の文章、最後に「事務局から」をバランス良く配置してある。雑誌の場合、余白ができがちだが、コラムや書籍情報、写真、イラスト、短歌、俳句、新聞記事の再掲、講演会案内などを配して紙面に変化を持たせながら収まりを工夫してある。また講演会など特別な行事があれば特集号を出して機動性も発揮している。巻頭随筆は堀見さんの創意だろうが、基本的にずっと踏襲されている。2001（平成 13）年 1 月に槲の合本 3 冊で第 20 回寺田寅彦記念賞を受賞されたのは本懐だっただろう。

B5 判の終りの頃は、会長の鈴木堯士さん、菊地時夫さん、細川光洋さんが編集していたようだ。61 号までの合本が 6 冊にまとまって、記念館に架蔵されているので読むのに便利である。

1995 年 4 月に会員 20 人が石川県加賀市の中谷宇吉郎雪の科学館を訪問・見学し、その旅行記や科学館の見学記が 5 号で特集されているが、2011（平成 23）年 4 月に会長兼編集長に就任した山本健吉さんも宇吉郎の会との繋がりを大切にされていた。66 号では山本会長が雪の科学館で開催中の中谷宇吉郎没後 50 周年企画展「中谷宇吉郎と寺田寅彦」を館長の神田健三さんや雪の科学館友の会代表の口野哲夫さんの案内で見学した報告がある。この号には神田館長による詳しい展示説明が載っている。72 号には「中谷宇吉郎雪の科学館開館 20 周年記念式典」への参加報告がある。

75 号では高知県立文学館で開催された「親愛なる寺田先生〜師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展〜」に協賛し、神田さんによる講演「寅彦と宇吉郎　師弟の交流」や小中学生を対象にした「雪と氷のふしぎ実験」の様子が詳細に報告されている。山本会長の奮闘は 92 号の追悼文と 93 号の追悼特集に詳しい。

改めて総覧してみると、合計 108 回発行で総 1889 ページになる。研究論文、講演記録などの主要記事数が 410 件、それ以外の記事（子ども科学教室報告（小学生の作文）、コラム記事、編集後記、資料的な記事、連絡事項など）が 251 件となっている。分類区分やカウントは微妙なのだが、筆者の私見で無理にやってみた。寅彦の巻頭随筆や会員名簿は除いてある。

以下思いつくままに『槲』の素晴らしさや目立った話題を挙げてみる。

（1）巻頭随筆によって寺田寅彦の作品に親しむことができる。ごく一部の引用であるが、全文を読むきっかけになってくれるとよい。多分、編者には選ぶ楽しみがあっただろう。
（2）春の総会と秋の研究会で講演会を実施し、記録を掲載している。その時々の演者の選定は素晴らしいと思う。講演は後に残らないことが多いのだが、丁寧な文章化作業に頭が下がる。
通常の講演（27 回）の外に、66 号では変化に富んだ行事（オルガン演奏、朗読、紙芝居、歌、「三毛の墓」合唱など）、70 号では、座談会（寅彦の家系、関弥生さん、留学中の大旅行、モミジの大杯、割れ目と生命、猫の斑紋のぬいぐるみ手作り）、75 号では先にあげた神田館長の講演、84 号では、鎌倉漱石の會の来高に合わせて市内の寅彦ゆかりの地や文学館を見学した記録がある。96 号では、寺田記念館周辺の「ゆかりの地」巡りの報告がある。その時々に合わせた企画を振り返るのも楽しいことである。
（3）専門家とアマチュア、双方が発表する場を作り、研究を深め、活動の幅を広げた。特に、寺田寅彦の書誌学を専門に研究されていた大森一彦さんの論文は広い知見に基づき、緻密に資料を集めており圧巻である。恒石直和さんの植物研究、小林勇伝、藤原咲平と信濃研究、堀見矩浩さんの竹崎音吉や堀見末子の資料調査、上田壽さんの藤田太郎の絵や寅彦の科学随筆考察、鈴木堯士さんの地質学や防災論、千葉明さんの田丸卓郎と田中舘愛橘研究、松尾宗次さんの X 線と結晶、柏木濶さんの熊本での下宿、などが思い起こされる。それ以外にも会員によるオリジナリティー溢れる論考が多数掲載されている。
（4）友の会会則にある「理科教育の推進と援助及び広報活動」に添った活動が継続されている。B5 時代には夏休みに記念館で「寺田子ども科学教室」を開催し、小中学生の感想文を載せている。指導者・参加者とも暑かったと思うが、14 回実施されている。（1 回は台風の影響で中止）。
A4 時代になると、高知市小・中学生科学展覧会に協賛、「寺田寅彦賞」と「友の会会長賞」を設けて表彰し、11 回にわたり実験報告を載せている。（途中、新型コロナ感染症拡大による中止があった。）もとは、実験の方法と結果、図表などを大きな模造紙に書いて掲示したものであるが、表を含めて活字化して掲載してある。毎回、小学生 2〜3 名の報告であるが、根気が必要で地味な作業の積み重ねである。
（5）寺田寅彦の二女である関弥生さんとの交流も印象に残る。25 号に報告があるように、2000（平成 12）年 3 月に関弥生さんから寅彦邸ゆかりのかえで（オオサカズキ）5 本が寄贈された。20 年以上の経過で大きく成長し、11 月末ころから南国の庭に映える真赤な紅葉が楽しめる。
槲に関さんの寄稿文は多いが、2006（平成 18）年 6 月にご逝去された。69 号で特集「関弥生様没後 7 年　関弥生さんを偲ぶ」が組まれ、多くの人びとが関さんを偲んでいる。
（6）73 号では多くの会員が参加できる企画として、寺田寅彦没後 80 年記念「私の好きな寺田寅彦随筆ベスト・ワン」を特集している。40 名からアンケートの回答があり、「団栗（どんぐり）」9 名が他を引き離して第 1 位になっている。選んだ理由の短文も添えられて、多くの会員が参加した、とても良い企画であった。また、80 号では会員から募集した「私の好きな寺田寅彦の言葉」が披露されている。
（7）寺田寅彦銅像設置活動も後世に残る。78 号に像の作者・大野良一さん講演「寺田寅彦先生の科学の眼に学ぶ」が載っている。2018 年 7 月 24 日、日曜市通りを挟んで寅彦の母校高知追手前高校を望む、図書館等の複合施設オーテピア敷地で銅像除幕式が執り行われた。83 号に記念行事の報告がある。
上記以外に、寺田家墓所や先祖の墓所清掃活動報告、シリーズになっている「人々がみた寅彦像」「TORAHIKO 曼荼羅」「寅彦の情報あれこれ」があるし、とても全部は紹介しきれない。今一度、全体をゆっくりと読み返し、先人の活動の跡をたどってみたいものである。
友の会 HP には「文庫」のページがあって、槲 62 号以降掲載の主要な文章が PDF でダウンロードできるので、ネット環境が整っている方にはこれもお勧めである。
以上、とりとめもなく書いてみたが、これからも活動の継続と発展を祈るものである。